

**非定住の自己形成を支援する自由
なコミュニケーションネットワー
クの構築**

神奈川県青少年問題協議会第1回企画調整部会
 平成30年9月10日（月）
 横浜国立大学 藤井佳世

学校教育とコミュニケーション

◦ 学習の基盤となる資質・能力

各学校においては、生徒の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む。)、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。(49)

【教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成『中学校学習指導要領解説 総則編』(平成29年7月)文部科学省】

情報ネットワーク社会における青少年育成・支援～青 少年のコミュニケーションと育ちを考える～

◦ 情報とは？

「行為者にとって行動の選択につながるような“意味”と“価値”を持ち、認識の不確かさを凝縮させる働きをする伝達内容。(中略)情報は静的な伝達内容であるにとどまらず、受け手を変化させる動的な作用力を持つのである。」(野家啓一)

今村仁司・三島憲一・川崎修編『岩波 社会思想事典』岩波書店、2008年、pp.159-161

メディア社会とコミュニケーション

◦ コミュニケーションとは？

「誰かと誰かとの間において、情報や知識、考えを運び、伝え、意味を互いに分けあうこと」(119)

◦ インターネットのコミュニケーション

- 情報の受け手は、発信者でもある
- 相互性、流動的な集まり、複数空間の同時可能性

藤井佳世「第10章メディア社会におけるコミュニケーション能力」、松浦良充編著『現代教育の争点・論点』一藝社、2015年

ネットワークとコミュニケーション

◦ Twitter の場合

集団の自然発生、明確な意思ではなく何気なく行われる、演技者でもありオーディエンスでもある→非明示的で緩やかな意味のまとまりを持った舞台の形成 (169)

対面的相互行為との違い：時間的制約、空間的制約がない、意味の制約がある、舞台からの離脱が容易

→抵抗を感じることなく自分がフォローしているユーザーのツイートの一部を無視できる＝曖昧さによる安定性の維持 (174)

現実世界の舞台と仮想空間における舞台とが接触する可能性がある (178)

上田慶祐「第8章 仮想空間における相互行為：Twitter上のクラスタに関するドラマトゥルギーの考察」、藤川信夫編著『教育/福祉という舞台—動的ドラマトゥルギーの試み』大阪大学出版会、2014年

ネットワークとコミュニケーション

◦ オンラインゲーム

あるゲームに参加するきっかけは「ふっと見て」という偶然であったが、人間関係はそのゲーム好きという「共通項」があり、「すごい楽しい」と強く肯定。

ゲームは、「完全に遊びが主体」で達成感はないが、「単なるゲーム」を「一緒に遊んでくれる仲間」がいて「楽しい」

ゲームは、「こんなに楽しいんだからちょっと来てよ」「一緒に遊ぼうよ」という感じ。仲間を増やす感じである。

ゲームのオフ会は、「一番年下」であり、「何も考えなくても押さえるところを押さえてくれて」「手際がいい」「大人は財力ある」と大人が先導する場所として位置づけられる。

→メディア空間を通して子どもの生活や生を支援できるのではないか

「人間形成論的バイオグラフィー研究の進め方—インタビューから解読まで—」2017年教育思想史学会コロキウム発表原稿「事例研究のプロセスと課題」

子どもとメディア

- ネットの世界では、アバターと呼ばれる分身がしばしば置かれるように、人間のキャラ化が促進されます。特定の情報だけを送受信し、一面的な人格イメージを意図的に操作しやすいからです。雑多な情報を切り捨てることで、イメージを純化させやすいのです。(中略) 単純化された人格であるキャラにとって、多種多様な情報はかえってノイズとなります。ネット・コミュニケーションでは、そのノイズのカットが容易なのです。(55)

- 今日では、一人でいることの孤独から逃れようとして多用されるケータイが、かえって一人でいることの恐怖を募らせるという皮肉な事態が生まれています。自己肯定感の揺らぎを手っ取りばやく解消しようとして、同質な人間だけで固まってしまうがちになっているからです。(55)

土井隆義『キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット、2009年

多様なコミュニケーション

- 「よくわかりあう」コミュニケーションは楽しい? (12)
- 「よくわかりあう」=「よいコミュニケーション」なのだろうか? (15)
- コミュニケーションが嫌い→よくわかりあうコミュニケーションが嫌いかも

奥村隆『反コミュニケーション』弘文堂、2013年

多様なコミュニケーション

- 言葉を用いないコミュニケーション

ポップミュージックとそれに合わせたノリ

スポーツ

ブランド

クレジットカード など (71)

N.ポルト『世界コミュニケーション』、村上淳一訳、東京大学出版会、2003年

多様なコミュニケーション

- 「感情型」の叱責法と「権威型」の叱責法

↓

子どもの感情や罪悪感に訴え、人の気持ちになることを促し、改心させたり、行動を返させたりしようとする。

主として自分が大人であるという権威に拠り所を求めている。(23)

恒吉僚子『人間形成の日米比較一かくれたカリキュラム』中公新書、2013年

多様なコミュニケーション

- 「コミュニケーションを始める入り口には、二つあることになる。一つは、自分の目にするものと考えることを客観化し、それを共通の合理的な言説によって言い表し、語られるべき内容の代表者ないし代弁者として、他者と同等かつ交代可能な人間として語る方法である。そしてコミュニケーションへのもう一つの入り口は、本質的なのは、きみ自身、きみが何かを語ることだという状況である。」(151-2)。

A.リングス『何も共有していない者たちの共同体』、野谷啓二訳、洛北出版、2006年

多様なコミュニケーション

- 異なりの顕在化を組み込むコミュニケーション
- コミュニケーションの場そのものをつくる

藤井佳世「第10章メディア社会におけるコミュニケーション能力」、松浦良充編著『現代教育の争点・論点』一藝社、2015年

子どもとメディア

- バトル・ロワイヤルの構図を支えているのは、私たちが生身を越えた「制度」に囚われ、そのなかでたがいに絶対的に隔てられた「個」でしかないという観念に包まれ、そして私たちの生きるいまが「将来」という不安に普段に襲われているというこの現実にはかならない。私たちは、そのいずれからともはや完全には逃れられない。しかしその構図にはまり込んで、そこに縛られてしまうありようを、どこかで抜け出して、私たちがなりのく生きるかたちをあらたに作り出すことはできないものか。(219)
- 人はあくまでいまの手持ちの力を使って生きる。新たな力が生まれてくるとすれば、それはいまの手持ちの力を使って生きていった結果の話であって、その逆ではない。素朴な暮らしのなかでは、発達はあくまで結果であって目標ではない。(228)

浜田寿美男『子どものリアリティ 学校のパーチャリティ』岩波書店、2005年

家庭生活と子ども

- 多様な家族の形
 - 共働き世帯の増加、ひとり親世帯の増加
 - 夫婦と子どもからなる家族モデルのゆらぎ
- 家庭支援
 - ドゥーラ：「母親に代わって赤ん坊の面倒をみる昔の『乳母』とはちがって、母親が子供の世話をしているときに、その母親をケアすることによって手助けをする」(243)人(E.F.キティ『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』、岡野千代・牟田和恵監訳、白澤社、2010年)
 - スクールホーム：ケア、関心、結びつきを重視した学校(J.R.マーティン『スクールホーム—ケア—する学校』、生田久美子監訳、東京大学出版会、2007年)

情報社会と子ども

- 二人称から三人称の関係へ

身近な肉親の怪我や病気などの「わたし—あなた」という二人称の経験が原点になって、三人称の他者の苦しみや痛みをイメージすることができる。不慮の事故などの当事者になる経験があってはじめて、他者への共感や共苦の感情が生じる。自然や他者との直接の交わりという二人称の経験の積み重ねこそが、三人称の他者への思い遣りの感情を育むのである。

高橋勝『情報・消費社会と子ども』明治図書、2006年、pp.37-38

子どもとメディア

- 非定住の自己形成空間とネットワーク
 - 「いま」の充実、長期的な自己イメージをもたない自己形成、リスク分散
 - 定住しない生き方の模索(168-174)
 - 新しい課題：定まった世界に支えられることなく成長し、どのように生きていくか
 - 何かの能力において未熟であったとしても、社会空間に関わり、生きる世界を構成する者として子どもを捉える

藤井佳世「第4章子どもの物語／学校の物語—非定住の自己形成と多様化する学校」、高橋勝編著『子ども・若者の自己形成空間—教育人間学の視線から』東信堂、2011年